

「第二次日本経穴委員会」便り

～第2回 作業を通して得たもの～

第二次日本経穴委員会副委員長・明治鍼灸大学教授 篠原昭二

当面の課題

経穴の位置に関する3カ国（日本、中国、韓国）のスタンダードを決定するのが当面の課題である。とくに、7月末日がリミットとして設定されており、それまでに3カ国のそれぞれの取穴法に関する検討を行って、3カ国で共通して取穴法に問題がない経穴と、取穴法がそれぞれ異なり、検討を要すべき経穴に分ける作業が、2004年7月25日（日）10:30～17:00の間に行われた。東京は連日の猛暑であったが、狭い日本鍼灸会館の図書室はさらに熱気に包まれて、ホットな討論が展開された。

経穴位置決定の基本原則

経穴の位置決定においては、なるべく古い古典文献を基準にするという取り決めがある。メンバーの小林健二氏のご尽力により、各経穴に関する種々の文献データの一覧表が準備され、文献ごとの取穴位置の異同が一目瞭然で比較することができるようになった。また、3カ国の取穴位置一覧まで併記していただいたことにより、同一資料での検討作業ができることとなり、検討作業の効率化に大いに貢献いただいた。

具体的な検討作業は、それぞれの経穴をメンバーに配分して手分けして進められることとな

った。具体的作業を通して明らかにすべきことは、以下の如くである。

- 1) 3カ国の取穴位置が同じものと違うものを分けること。
- 2) 同じものについては、古典文献と一致しているものとそうでないものとに分ける作業が行われた。

3カ国間で取穴位置が異なるものについては、古典と照らし合わせて、最終的な位置決定がなされなければならない。

3カ国で取穴位置が同じで、古典とも一致している経穴については異論がないものとして、次の取穴部位の表現方法等の作業に回すことになる。一方、3カ国で一致しているが、古典と異なる場合があり、これらの経穴については、要検討経穴とした。

日本案、269穴が決定

7月25日に行われた第3回作業部会において、合意できた経穴（3カ国で取穴位置が同じかつ、古典とも一致しているもの）が269穴、問題のある要検討経穴（①3カ国間で取穴位置が異なるもの、②3カ国で同じであるが古典と一致していないもの、③3カ国で同じで古典とも一致しているが、具体的に取穴をする場合にさらに詳細な表現が必要と思われるもの）が92穴、

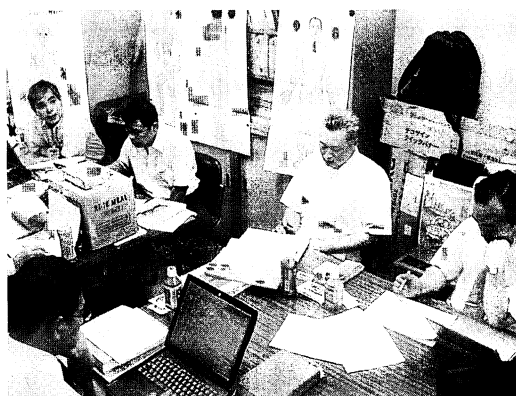
決定した。とくに③は、足陽明胃経の不容穴、承満穴といった経穴の取穴位置は3カ国でも一致し古典とも一致しており、いずれも「巨闕穴の外方2寸、天枢穴の上6寸」である。取穴位置については問題がないものの、規定通りに取穴したならば、ほとんどのケースで肋間の上に取穴することになる。一部の文献では「肋骨下」という記述があり、こういった実際の取穴に関する位置決定についても検討課題とされた。

「浮郄、委陽」の謎

浮郄穴・委陽穴は、委中穴の外方で、大腿二頭筋腱の内側に位置している。一方、甲乙、千金、外台、銅人等の文献では承扶穴の下6寸とあり、殷門穴の外方に取られている。このように、3カ国では一致しているものの、古典との整合性のとれていない経穴は結構見られる。とくに委陽穴は、「下合穴」であり、経絡治療家にとってかなり使用頻度の高い経穴と思われるが、文献に基づいて位置を変更して良いものかどうか、慎重に進める必要がある。

肩髃穴の位置は適切か？

肩髃穴の位置も問題となった。種々の目の覚めるような指摘は、しばしばメンバーの浦山久嗣氏の指摘による。肩髃穴の取穴位置も3カ国でほぼ同じであり、古典の記述もほぼ一致している。ところが実際の取穴位置についてみると、肩を外転してできる前のくぼみ、肩峰と上腕骨の間、肩峰外端下際など、それぞれが近い位置にあるが、決め手を欠く。その次の「巨骨」穴が鎖骨外端と肩峰の間（肩鎖関節の内側）とすれば、肩髃穴の位置は、鎖骨と肩峰の間の外側部に位置する（肩鎖関節の外側）と考える方がむしろ合理的といえる。そして、このような取穴位置であっても、古典とも矛盾することはな



議論を重ねる委員会のメンバーたち



第二次日本経穴委員会の面々

いと思われるのである。

結び

種々の作業を通して、当然あるものとして疑いのまなざしもなく、正しいのだと信じて教育してきた経穴が、実は多くの矛盾と異同、移動を重ねて変遷してきたものであることが、今更ながら思い知らされた感がある。

まさに、「目からうろこ」といったことが種々指摘された。これらの作業はまだ始まったばかりである。力を合わせて、よりよい作業ができることを期待してやまない。

(〒629-0392 京都府船井郡日吉町)